葬送儀礼（葬儀）の今昔と意義

斯波　随覚

◎民衆の葬儀は鎌倉時代から

民衆の葬儀が始まったのは鎌倉時代からと言われています。今から七五〇年程前には葬儀の習慣はなく、遺体は道端に捨てていたのですが、法然・道元・親鸞・叡尊・忍性などが親孝行の実践として推奨したのが葬儀の始まりだと言われています。それまでは高い位の僧侶が死んだ時のみ、葬儀は行われていたようです。そのため、今でもお剃刀をあてたり、七条袈裟や修多羅を棺の上に掛けたりするのは仏門に入った人という意味があります。

◎江戸時代初期（一六三五年ごろ）

寺請倒度が制定され、一七〇〇年ごろから葬儀に僧侶がつくようになったらしい。それまでは村落共同体の中で葬儀を仕切っていたようです。

◎昔の葬儀

死者がでるとまず隣保の人が二人

で寺に連絡に訪れ、それを受け住職が臨終勤行にお参りする。昔は隣保の者が全てを取り仕切って葬儀を行っていたようです。（準備・料理・案内・買い物など）葬儀の日時を皆で相談して決め、その前夜がお通夜、お通夜には僧侶は参らずに各家で家族・親族・有縁の者で勤めた後、夜通しでご遺体のそばで過ごし、個人の生前の事を語ったり、人生訓や仏事の事などを次世代に伝えたりして、通夜は故人を偲ぶ場であり、様々な事を伝えていく場でもあったようです。

葬儀はほとんど家で行われ、出棺勤行を仏壇で勤め、その後出棺、葬列を組んで三昧まで行き（道中は路念仏を勤める）大きな石の蓮台の上に棺を安置してその前で葬場勤行を勤め、その後、茶毘湯で一昼夜かけ火葬し（夜中に火葬の状態を見に行く役がいたそうである）翌日収骨し、家へ持ち帰り、還骨勤行を勤めていたようです。

赤穂市では昭和三〇年四月一日に今の場所に火葬揚ができるまで各村に三昧場があり、そこまで葬列を組んで行く名残りがありました。

◎現代の葬儀

最近では病院で亡くなる人がほとんどで、病院から家に連れて帰り（中には葬儀会館へ直接遺体を搬入することもある）葬儀社と葬儀の日時を決め、それから寺へ電話連絡する。連絡を受けた住職が臨終勤行に家または葬儀会館にお参りし、通夜・葬儀の日時を聞くことが多い。今は葬儀社が丁寧に葬儀までの準備から執行・還骨にいたるまで世話をして下さり、近所の人にはあまり迷惑をかけたくないという遺族の思いもあり葬儀社に全てをお任せする家が多いようです。

（中には近所の人が亡くなって葬儀を出したのに知らない人もいる。）

そのためか？　最近は通夜・葬儀も

形式的になってしまい、賑やかな通夜や葬儀が多く、しめやかに故人を偲んで夜通し語り明かしたりすることも少なくなったのではないでしょうか。

浄土真宗の葬送儀礼の意義

お釈迦様の入滅（死）

釈尊の死は信者たちにとって大きな衝撃であった。弟子の阿難尊者も悲しみに打ちひしがれていた。しかし、アヌルダ尊者は釈尊の死は諸行無常の教えにかなった現実と受けとめ、涙にくれる阿難に対して、日頃、釈尊から聞いた教えを、夜を徹して説いたと伝えられています。ここに釈尊の死を通して、厳然たる無常の道理を知り、生前の釈尊が説かれた仏法を聞くという法縁が開かれているといえる。

臨終勤行（枕経）

本来、命が終わろうとするときに臨

んで、これまで永年お育てに預かった阿弥陀仏にたいするお礼のお勤めで、本人が執り行う勤行です。しかし実際はそれを行うことができませんから、住職が代わってお勤めいたします。遺体に対して読経するのではありません。

通夜勤行

葬儀の前夜に、近親者をはじめ有縁の人々が仏前に集い夜を通して執り行う勤行。

故人の生前の厚情に感謝しつつ、故人も後に遺されたものも共々に阿弥陀仏に等しく摂め取られていることに対して報恩感謝の思いから行う勤行です。（由来は釈尊の入滅）

出棺勤行

本来、ご遺体を納めた棺を葬儀場に送り出すにあたって、執り行う勤行です。家の仏壇の阿弥陀様の前でのお勤

めで、通夜勤行と同じく、報恩感謝の思いから行う勤行です。

葬場勤行

葬儀場で近親者や有縁のものが集まり執り行う勤行で、故人を偲びつつ仏に感謝の念をもち、お浄土の故人、わが身もいずれお浄土への思いをめぐらせて、自らの命を顧みる勤行です。故人が生前、慣れ親しんだ偈であることに加え、親鸞聖人の教えにであう縁であるため正信偈をお勤めする。

還骨勤行

火葬場から遺骨を持ち運って、仏壇の前または横に白木机または白布で覆った小机の上に安置してつとめる勤行です。人生無常のことわりを改めて気付かされていく場です。

◎「葬送儀礼」というのは、近親者の死をとおして、遺されたものが故人を

偲び、改めて生前の厚情に感謝の気持ちを表す場であり、また、慌ただしい日常生活のなかで、真摯に振り返ることの出来なかった人生無常の道理を知らされる場でもあります。そして、何より重要なことは、いままで合掌するご縁のなかった方々が合掌してお念仏をする縁が訪れているということです。

私は僧侶として、葬儀という悲しいご縁を通して、人生無常の理を、命のはかなさ大切さを伝え、その命に向かって、お浄土から南無阿弥陀仏に慈悲の心を込め、呼び続けてくださっている阿弥陀仏が故人も後に遺されたものも、今まで合掌することがなかったものも、共々に等しく摂め取られていることを門信徒に伝えていかなければと思っています。